The Great Gatsby を書くことをめぐる Nick の密かな企て

佐藤耕太

1. Minter の議論に対する批判

David L. Minter の指摘に従えば、「Gatsby の夢」とは第一に莫大な富を獲得し華麗 (グレート) な大富豪になること、第二に Daisy と結ばれることであった[1]。Gatsby が一つ目の夢を叶えたことは、*The Great Gatsby* (以降、*TGG*) を一読すれば明らかである。しかし、Minter は *TGG* で語られるそうした言説が書き手である Nick の創作であり、Gatsby は (実際に莫大な財産を手にしていても) 現実には華麗たりえてはいなかったと指摘するのである。つまり、*TGG* の書き手 Nick その人が現実の Gatsby の人生や運命をめぐる種々さまざまな委細を整理し、そこに彼独自の想像をくわえるという戦略によって、華麗なホストとしての Gatsby を *TGG* のなかに描き出し、現実には果たされなかった Gatsby の夢をそのテクストのなかで (「物語」として) 叶えた、と Minter は主張するのである (Minter 87-89)。一方、みずからの議論において持ち出していた Gatsby の二つ目の夢、すなわち「Daisy との恋愛の成就」の詳細については、Minter は論考のなかで一切言及していない。要するに Minter の議論を補足を交えてまとめるなら次のようになる。Nick は *TGG* において華麗な大富豪としての Gatsby の夢を実現することに成功したが、他方で Daisy と結ばれる夢をめぐっては、それ自体明らかに実際の出来事とかけ離れているために、その夢の成就の光景を描くことは憚られた。しかしながら、本発表の要諦は、*TGG* のテクストの精読 (close reading) によって、*TGG* の書き手 Nick がそのテクストのなかに「Gatsby と Daisy の結ばれない物語」を描きながら、同時に、「Gatsby と Daisy の結ばれる物語」も密かに書き込んでいるいきさつを明らかにするところにある。そうした「もうひとつの物語」を解明する際に本発表がとりわけ着目するのが、Nick が *TGG* のテクストに反復的に書き込んでいる「二項対立」的言説およびその「書き方」である。

2. Nick による「二項対立」および「二項対立の同時併存・相互浸透」的言説の書き込み

TGG には二項対立的言説がいたるところに書き込まれている。例えば、〈上層〉出身の Daisy に対して〈下層〉出身の Gatsby、Nick (および Gatsby、Daisy そして Tom) がかつて過ごした〈West〉に対して彼らが向かう〈East〉、Gatsby の〈過去〉と〈現在〉などが容易に挙げられる。二項対立に関する従来の議論においては、本来的に対立する二項の一方による他方の優位性や打ち消しの問題が重要な論点とされてきた。しかしながら、ここで特筆しておきたいのは、*TGG* においては対立的な二項が必ずしも互いに打ち消しあうことなく、むしろ同じ環のなかに併存している事態、また相互に浸透し合っている事態[2]、すなわち「二項対立の同時併存」および「二項対立の相互浸透」的言説の方が二項対立的言説より数多く登場していることである。

二項対立の同時併存に関してとりわけ印象的な一節は第二章で登場する。Tom と Myrtle のパーティーに辟易した気分を Nick は "I was within and without, simultaneously enchanted and repelled by the inexhaustible variety of life" (36-37[3]) と書き表している。その一節で Nick は同時に位置することのできないアパートの〈内〉と〈外〉、〈上〉("high over the city" [36]) と〈下〉("in the darkening streets" [36]) に同時に位置している。それだけでなく、彼は尽きることのない人生の様々な在り様に〈魅了〉されると同時にそれを〈忌み嫌って〉いる。要するに、先述の Nick の文章において複数の対立的な二項が対立することなく併存しているのである。他方、二項対立の相互浸透を端的に示すものとして第九章の次の一節が挙げられる。〈生者〉Nick は客間に横たわる〈死者〉Gatsby に向かって "I'll get somebody for you, Gatsby. Don't worry. Just trust me and I'll get somebody for you" (163) と思念し、その後〈死者〉Gatsby から返答を受け取る (164)。その一節のなかに本来的に断絶された・対立する〈生〉と〈死〉が相互に交通可能・相互浸透的な様態にある様子を読み解くことができるのである。なお、*TGG* には上述したもののほかにも二項対立の同時併存・相互浸透的言説がいたるところに書き込まれていることを強調したい。

3. 繋ぎ手としての Nick

次に本発表は *TGG* の書き手 Nick が作中の彼自身を「対立する二項を繋ぎ合わせる人物」として意図的に描き出しているいきさつを詳しく検討してゆく。*TGG* で Nick は自身の家が West Egg の先端に位置し、海峡から 50 ヤードの場所にあると明かす (7)。つまり、書き手 Nick は作中のみずからを〈海〉と〈陸〉の (ほぼ) 中間地点に恒常的に身を置く人物として描き出すのである。それだけでなく、Nick 宅の両側にはそれぞれ豪華な屋敷が立っており、右側に Gatsby 邸があり、左側には持ち主不明の邸が建っている (7)。よって、Nick が身を置く場所は〈有名〉と〈無名〉の中間地点、すなわち対立する二項を繋ぐ位置ということになる。他方、そうした Nick の特性をめぐってより枢要であるのは、*TGG* の書き手 Nick が作中の彼自身を「対立する位置にいる人々」、すなわち〈West Egg〉の Gatsby と〈East Egg〉の Daisy および Tom を繋ぎ合わせる人物として描写していることである。第五章での Gatsby と Daisy の再会は Nick の取り計らいによって実現していた (83)。第六章での Tom の Gatsby 邸への

訪問の場面は Tom が上述の Daisy と Gatsby の関係を疑っての行動と読むことができ、その点で Nick は Gatsby と Tom の邂逅に大いに介入していることになる。第七章での Buchanan 邸で Gatsby、Daisy そして Tom が会合する場面にも、Nick の繋ぎ手としての特性を確認できる。Gatsby はその場で Daisy に "I never loved you [Tom]" (110) と言わせようと画策しており、彼は Nick をその目撃者・証人に仕立て上げようと計画していた。よって、その三者の会合が成立するためには Nick の介在が不可欠となる (と書き手 Nick は作中の彼自身を描いている)。そうした複数の事態から読み解くことができるのは、書き手 Nick の「繋ぎ手」としての宣言であり、そうした役割への強烈な意思である。

4.〈天〉と〈地〉の同時併存・相互浸透

繋ぎ手としての Nick の役割を念頭に置きつつ、本発表はいま一度 *TGG* に書き込まれた二項対立をめぐる議論に立ち返る。ここでとりわけ着目するのは〈天〉と〈地〉である。Nick はその二項対立の同時併存・相互浸透的言説を *TGG* のテクストに数多く散りばめている。第三章冒頭、Gatsby 邸でのパーティーの様子を Nick は "In his [Gatsby] blue gardens men and girls came and went like moths among the whisperings and the champagne and the stars" (40) と表現する。この一節において、本来的には〈地上〉で生活するパーティーの参加者が〈空＝天〉を自由に飛び回る蛾へ変身・浸透している。また、〈天〉にあらねばならない星々が人びとの囁き声やシャンパンとともに〈地上〉に並置されている。その他にも、〈月＝天〉が〈ケータリングのバスケット＝地〉に属しているように描かれる "[Jordan's] remark was addressed to the premature moon, produced like the supper, no doubt, out of a carterer's basket" (44) など、*TGG* において同様の言説は枚挙にいとまがない。

本発表は、続いて、そうした Nick の書き言葉に関する技巧とその目的を紐解いていく。とりわけ注意深く検討するのは、「Daisy と Gatsby の二度の別れの場面」での彼らの位置関係である[4]。Gatsby と Daisy の一度目の別れは Gatsby の出征および Daisy の結婚に起因していた。いきさつとしては、1917 年 11 月に Gatsby は出征する (75, 86, 149)。つまり、彼は〈戦地＝地〉に位置することになる。一方、Daisy は 1919 年 6 月に Tom と結婚し、*TGG* ではプラザホテルの〈上階＝天〉にいる様子が描かれる (76)。ここで留意したいのは、そのふたつの出来事の間には 1 年半の間隔が存在しているにもかかわらず、Nick の記述ではその間の説明が単行本にして 7 行のみで済まされ、時間の推移に関する記述は存在するが、その内容は必要最低限に留まっていることだ (75-76)。そのため、Nick の文章では 1917 年の Gatsby の出征と 1919 年の Daisy の結婚の話があたかも一連の出来事かつ対比的なものであるかのような錯覚を与える仕掛けとなっている。このことから分かるのは、*TGG* の読者が「『Gatsby が戦場＝〈地〉を進むのに対して Daisy は結婚式場の上階＝〈天〉にいる』という言説」、また「『Daisy と Gatsby の別離』と『〈天〉と〈地〉の二項対立』の範列性・比喩性」を読み取れるように、書き手 Nick が *TGG* のテクストを緻密かつ慎重に設計している、ということだ。他方、第七章終盤から第八章序盤にかけて描かれる Gatsby と Daisy の二度目の別れの場面にも、彼らが〈天〉と〈地〉に分かたれている様子を確認することができる (142, 144)。

5. *The Great Gatsby* を書くことをめぐる Nick の密かな企て

上述した *TGG* の精読およびテクスト分析から、本発表は最終的に次のような *TGG* を書くことをめぐる Nick の密かな企てを読み解く。第一に、Nick は「Gatsby と Daisy の別離」を「〈天〉と〈地〉の二項対立」と重ね合わせて描くことで、それらが比喩的関係にあることを読者にほのめかした。第二に、その比喩性を利用し、Nick はみずからが繋ぎ手としての強固な意志のもと、*TGG* に「〈天〉と〈地〉が併存する・相互に浸透する (すなわち、繋がる) 言説」を再三にわたって書き込み、そうした言説に「Gatsby と Daisy の結ばれる物語」を仮託した。第三に、Nick は、〈天〉と〈地〉のみならず、その他種々さまざまな二項対立の同時併存・相互浸透的言説を *TGG* の全範囲にわたって書き込むことで、現実世界における Gatsby と Daisy の絶対的な別離が解消された言説、すなわち「Gatsby と Daisy が隣り合わせて心を通わせる」、実現することはなかったがありえたかもしれない「もうひとつの物語」を比喩的な仕方で秘密裏に描いた。このような「書き言葉」(エクリチュール) および「書き方」の妙技によって、*TGG* の書き手 Nick は Minter の云う Gatsby の二つ目の夢も *TGG* のテクストにおいて、ひっそりと、と同時に大胆に成就させていたのである。

---

[1] David L. Minter. 'Dream, Design, and Interpretation in *The Great Gatsby*' in Ernest Lockridge [ed.] *Twenty Century Interpretations of The Great Gatsby*, New Jersey: Prentice Hall Direct, 1984. p. 85.

[2] そうした図式は、篠原資明の「異交通」のモデル、すなわち「相互の異質性を保持しながら行われる交通」また「還元しえないほど異質なもの同士が、にもかかわらず相互に浸透し合うというもの」と相応するものと考えられる (篠原資明『トランスエステティーク』岩波書店、一九九二年、一七頁、一八頁、一七頁)。

[3] 本発表での引用およびページ番号は F. Scott Fitzgerald. *The Great Gatsby (Evergreens, 142),* Alma Book, 2016 に拠った。

[4] Nick は、基本的には、Daisy を〈天〉の特性を纏う人物として描き (第一章中盤で Daisy が初めて登場する場面は示唆的である [10])、Gatsby を〈天〉と〈地〉の双方の特性を持つ人物として描いている。